

論文要旨と審査結果報告

THE ROLE OF JAPANESE CORPORATE R&D IN THE UK: MEASURING BUSINESS AND ACADEMIC BENEFITS

学位申請者氏名： 妙見由美子 (DOC10104)

論文提出日： 平成 27 年 4 月 16 日 (木)

論文発表会開催日：平成 27 年 5 月 18 日 (月)

審査委員会開催日：平成 27 年 5 月 18 日 (月)

論文最終版提出日：平成 27 年 7 月 28 日 (火)

I. 論文要旨

本研究は、主として英国のサイエンスパークに進出し、R&D 拠点を設けた日本企業の活動について、日本企業側および現地国側（サイエンスパークおよび大学）の両方の観点から分析を加えたものである。サイエンスパーク経営の観点からは、外部資金の導入や知識スピルオーバーが地場企業に与えるインパクト、大学研究テーマに与えるインパクトなどの政策効果に関する分析が行われた。また、企業経営の観点からは、R&D 拠点と知識ソースの地理的近接性が企業側の満足度に与える影響の分析が行われた。これら両面から詳しい調査を行った先行研究はあまり多くなく、本研究は産学連携の効果を考える際に、アカデミアと企業の両側からインパクトを見る重要性を提示しているといえる。

分析の結果、日本企業の英国への進出は、大学等の組織との関係や蓄積された知的財産へのアクセスと事業化という側面よりも、特定の研究者との関係構築と維持、そしてそれによる欧州のサイエンス・コミュニティへの参加を期待する側面が強く、それらの成否が企業側の満足度と深い関係を持っていることが明らかとなった。また、サイエンスパーク側から見ると、外国企業の誘致と資金導入には成功しているものの、当初想定された技術移転と産業化や、外国企業から地場企業への知識スピルオーバー効果はほとんど見られないことが明らかとなった。

これらを踏まえて、サイエンスパーク運営に対する示唆としては、特に外来企業と地元企業とのネットワーク構築の支援を重視すべきことや、サイエンス・コミュニティとしてのその地域の特徴を明確化しアピールすべきこと、また日本企業に対しては、進出先地域の若手人材育成を通じたネットワークの深化や、ホスト国が提供する研究資金やプロジェクトをも活用すべきことなどを示した。

II. 審査報告

審査委員：主査 鈴木 潤
委員 角南 篤
委員 後藤 晃
委員 浅川 和宏（慶應義塾大学大学院経営管理研究科・教授）
委員 園部 哲史

平成 27 年 5 月 18 日に博士論文発表会が開催され、引き続き論文審査会が開催された。

本論文は、日本企業による英国への R&D 進出について、企業経営としての観点およびアカデミア（サイエンスパークおよび大学）としての観点の両方から考察を行っており、またデータ収集の手法的にも、多数のインタビューおよび質問票調査を網羅している点が評価された。

一方で、なぜ英国における日本企業を研究テーマとして取り上げる価値があるのか、歴史的考察およびシステムの特徴からの説明を加えるべき、また日本企業の在英 R&D 拠点の考察に際し、本社の属性や産業セクターの特性、イノベーションの種類、当該拠点の戦略的役割なども勘案した分析を加えるべき、さらに先行研究に対する理論的貢献と仮説導出過程の明確化、ホスト国に対する政策的インプリケーションの精緻化などが必要であるという意見が出された。

改善点が多く指摘されたため、数か月の期間をかけて修正を行い、全委員に対して個別に修正点を説明し、再度確認いただくこととした。

平成 27 年 7 月 28 日に修正論文が提出され、主査によるチェックを経て、各委員に対する個別説明を行った。最終的には各委員から主査一任の判断を頂き、主査が再度チェックし、適切に修正されていることを確認したうえで、最終論文として受理した。